

巻頭言

「マギーズ・センター」から考える新しい医療と建築

非常勤研究員・京都大学大学院工学研究科教授 三浦 研

イギリスのマギーズ・センターは、一人の女性の願いで生まれた、がんの患者さんやその家族、友人を対象とした無償の相談センターで、建築のみならず、医療、インテリア、ランドスケープの分野で世界的に注目されている。

実は、このセンターは建築の申し子とも言える。なぜなら、センターのきっかけとなった1人の女性、故マギー・ジェンクスさんはロンドン AA スクール出身のランドスケープ・アーキテクトで、その夫、チャールズ・ジェンクスさんは、日本でも『ポストモダニズムの建築言語』、『複雑系の建築言語』などの訳書のある、世界的に有名な建築評論家だ。ご夫妻が友人の名だたる世界的建築家にセンターの設計を依頼し、第一号となるセンター(写真1)が、マギーさんの通院していたエジンバラの病院の敷地内に完成したことが、イギリス国内に次々とマギーズ・センターが次々と作られるきっかけになった。

こうして出来上がった建物はいずれも素晴らしい。たとえば、フランク・O・ゲーリーがスコットランドのダンディに設計したセンター(写真2)はイギリスの切手に取り上げられている。現在までに、英国国内では16カ所、イギリス国外においても、スペインのバルセロナ、香港においてもセンターが建設され、現在、東京でも計画が進んでいる。

マギーズ・センターは、ジェンクス自身「家のように家でない」「病院のように病院ではない」、と呼ぶ新しい居場所だ。センターには設計の指針となる共通理念(表1)が設



写真1 マギーズ・センター・エジンバラの内観
(1996年竣工、設計：リチャード・マーフィー)



写真2 マギーズ・センター・ダンディの外観
(2003年竣工、設計：フランク・O・ゲーリー)

表1 マギーズ・センターに求められる環境

- ・建物の広さ：280㎡程度
- ・玄関：分かりやすく威圧感を与えず暖かみのあるもの
- ・居間兼図書室：施設内部全体を見渡せる配置、自然光を多く取り入れる。中庭の芝生、木、空を眺められる窓
- ・オフィススペース：訪れる人をすぐ迎えられる場所、玄関や居間が見える場所に配置。事務室や受付のようなデザインは避ける
- ・キッチン：田舎風のキッチンのインテリア。12人が座れる大きなテーブル、セミナー、ディスカッションの場としても使用。誰でもコーヒーや紅茶を自分でいれて飲めるような空間
- ・講習やミーティング用の大きな部屋：14人がくつろげる広さ、折り畳み椅子の収納スペース、利用目的に応じて間仕切りが可能
- ・居間兼カウンセリングルーム：12人まで収容できるあまり大きくない部屋。皆が詰めて座ると、打ち解けた雰囲気生まれる。
- ・2つの小さな部屋：カウンセリングやセラピー用の小部屋。大きな窓から芝生や木、空が見渡せる。未使用の時は開け放ち、人が自由に出入りできる引き戸を設けるとよい。
- ・化粧室（3つくらい）：洗面所と鏡を備える。プライバシーが守られるようなデザイン
- ・庭と10台くらいの駐車場：庭は建物との連続性があることが望ましい。腰掛ける場所があり、キッチンから行きやすい配置に
- ・その他・雰囲気：自然光にあふれ、庭や中庭など自然に触れられることが大切。事務所のような雰囲気は極力避ける。自宅のような雰囲気。病院を訪れるときの楽しみになるような場所。人生は楽しいと思えるようなデザイン

竹中工務店『approach』（2010年冬号）

けられ、それに基づき、世界的に著名な建築家が設計を手がけている（ウェールズの都市スウォンジのセンターは黒川紀章氏による設計である）。

ユニークなのはお手洗いの設計だ。お手洗いは、患者やその家族が涙をこらえきれなくなった場合に1人きりで泣けるように、そして、泣いた後、気分を落ち着かせるまでそこで待てるように、椅子と雑誌が置かれている。患者の気持ちにより添った設計は故マギーさんの実体験に根ざした結果だ。

椅子も吟味された名作椅子ばかりで、一体いくらかかったのかと心配になるほどだが、それだけインテリアを重視する結果といえる。椅子の配置にも特徴があり、90度の配置や正面配置などの堅苦しい向き合い方は避け、「空間に柔軟性をもたせ、利用者により多くの参加の機会を与えるように、もしくは一人の時間を持つことを可能にするように、家具を配置し、センターの利用者それぞれが、使いたいように利用できるよう、可能な限りの柔軟性を与えることを目標」として、自然に向き合える配置が選択されている（写真3、4）。

くわえて、センターはテレビを置かない。会話を促し、自分と同じ境遇にいる他の利用者や、雑談することを楽しむことを、テレビは邪魔するからだ。わが国の病院が待合室に決まってテレビを設置して、それに向かって椅子を並べると大きな違いといえる。

運営面でもきめ細やかな配慮がある。例えば、新しい患者が相談に訪れた場合、受付で名前や住所を記入させるような、管理的な情報収集は行わず、本人が名乗らなければ、名前すら聞かない。スタッフは、訪問者と会話した後で、事務室のホワイトボードに、今日、



写真3 マギーズ・センター・インパネスの内観
(2005年竣工、設計：ペイジ・パーク)



写真4 マギーズ・センター・ファイフの内観
(2006年竣工、設計：ザハ・ハディド)

何歳くらいの人が、どのような相談で訪問した、という事実を記載して情報を共有する。受け付けで一通りの個人情報を入力するわが国と比べると、雲泥の差といえる。

患者が訪問すると、「Tea or Coffee?」と尋ねられ、自らキッチンで紅茶やコーヒーを入れるように声を掛けられる。これには2つの意味が込められている。まず、イギリス人にとって、お茶を出される場所は招かれた場、つまり他人の家になるが、センターは、自宅のようにくつろいで過ごしてもらいたい。そこで、自分でお茶を入れてもらうという。もう一つの狙いは、患者は、治療中、医師や看護師の指示に従って動く習慣が身につく、生活が受動的になりやすいので、お茶を飲むという些細な行為でも、自らが選んで決める、主体性を回復する機会にしてほしい、と考えるからだという。

現在、センターのCEO^(注)は故マギーの看護師を務めたローラさんだ。訪問時にデザインのポイントを尋ねたところ「マギーズ・センターの建物には、ちょっとユーモアが必要」という答えが返ってきた。建物が美しいのは当然。しかし、その美しさがピンと張り詰める、緊張を強いるような美しさであってはならない。つらい気持ちで訪れても緊張を解きほぐすような美しさだ。センターの理念に共感した世界的建築家がユーモアを忘れずに、それぞれのセンスで素晴らしい器を作り、そこに、最適なインテリアを据える。建築、インテリア、ランドスケープが一体となって「生きる希望を失わせない環境」を作り出す。マギーズ・センターは、単にがんの相談センターの範疇を超え、新しい環境のあり方を指し示している。

(注) CEO：最高運営責任者

(写真：著者撮影)